

言語行動の発達 (VI)

子どもの指さし行動の発達と母親の応答行動

(9から30か月児の縦断観察資料の分析)

教育心理学研究室 荻野美佐子
駒沢大学教育学研究室 大浜幾久子
国学院大学教育学研究室 斉藤こずゑ
教育心理学研究室 武井澄江
// 辰野俊子

The Development of Verbal Behavior (VI)

Development of Pointing Behavior in Infants and Mothers' Responsive Behavior:
Longitudinal Study of Infants from 9 to 30 Months Old

Misako OGINO, Kikuko OHAMA, Kozue SAITO,

Sumie TAKEI and Toshiko TATSUNO

The data reported in the present paper were obtained in longitudinal home observations of 9 first born infants interacting with their mothers. Every pointing behavior by infants at the month's age of 9, 11, 13, 17, 21, 24 and 30 was analyzed in terms of the cause and the object of pointing as well as its accompanying vocalization. In addition, every mothers' verbal and/or non-verbal behavior immediately after the infants' pointing behavior was examined. It was demonstrated that mothers' responsive behavior varied according to developmental levels of infants' pointing behavior, but that it was always to carry out a M-I interactional activity. At lower levels, even if the infant pointing behavior showed no communicative intention, it was taken as a communicative behavior in the mother's responsive behavior with the aid of contexts and situations. It was suggested that the mother's responsive behavior to the infant's pointing behavior was a kind of monitoring, and that the mother's monitoring was essential for the infant to become an active partner of communication by the age of 2½.

I. 問題

本研究の目的は、母子相互作用場面における母親の行動を分析することによって、前言語期の主要な伝達的身振りである子どもの指さし行動について、伝達機能の発達を調べることである。

子どもの伝達能力の発達を調べるために、母親の行動を分析することについて、我々は次のように考える。第1に、方法論としての妥当性であるが、一般に、ある人の伝達行動は、相手の応答行動によって伝達効果の有無が決定される。つまり、発話行為論における発話媒介の力 (perlocutionary force) (Austin, 1975) の概念を適用すると、子どもの行動が相手のどのような応答行動を

引き起こしたかということから、逆に、子どもの行動の伝達効果を知ることができると思われる。特に前言語期では、子どもの行動に比べ、母親の行動の方が客観的に観察、理解しやすいという利点もある。したがって、母親の応答行動を詳しく分析し、母子相互作用における子どもの行動の伝達機能の成立を調べることは有効であろう。また、この方法は、初期言語発達研究で1970年以来有効な方法として用いられてきている解釈的分析法(interpretative analysis)をより組織化したものとみなすことができる。解釈的分析法では、子どもの一、二語発話の意味機能を決定するために、相互作用の相手の行動をも含めた文脈情報を利用しているが、分析者が意味決定の基準として文脈情報のどこを利用したのかを明示することはなく、その意味で主観的なものであった。そこで、相互作用の相手の応答を組織的に分析するという方法は、解釈的分析法の客観性を高めることに寄与するものと思われる。

第2に、母親の行動を分析することは、方法論としてだけでなく、それ自体、1つの研究目的となりうる。子どもに対する母親の行動の研究では、最近、特に伝達行動や言語の発達に関して、母親の行動が、子どもの発達の变化に敏感であり、子どもの行動を一方向的に刺激したりコントロールするものとしてよりも、応答的なモニターとしての働きを持ち、子どもの行動に相応する変化を示すことを示唆する傾向がある(Schaffer et al., 1978; Masur et al., 1980; Chapman, 1981)。おそらくそのような母親の行動の変化は、母親自身にも意識化されない場合が多く、質問紙などでは測定不可能であろう。したがって相互作用過程での直接の分析が必要になる。このような母親の行動に対して、子どもの側は、自分の行動に随伴する母親のモニター行動の理解を介して自分の行動を確認し、さらに発達の变化が促されるものと思われる。そこで、本研究では母親行動のモニターの性質をとらえることをもうひとつの目的として、母親の行動を分析する。

次に子どもの指さし行動の伝達機能については、月齢に伴う発達の变化が予想されるが、その発達の变化と、それに対する母親の応答行動の質的变化に影響する要因として次の3つが考えられる。第1は、子どもの指さしの対象が何か、特に三次元の事象か二次元の絵かの違いである(武井他, 1982)。具体物を通しての現実に直結したやりとりや、絵という現実の媒介物を通してのより抽象的なやりとりなどは、相互作用のテーマや質に差異をもたらす、ひいては指さしの機能や、母親によるその理解にも差をもたらすだろう。

第2に、子どもの指さしが発声を伴うか否か、その発声が言語か否かということも重要である。指さし行動ということには、指さしだけでなく、視線や発声が併用されることが含意されている。このような複合的伝達行動への発達およびその果たす役割を調べることは、伝達能力の発達を調べるうえで欠くことができないものと考えられる(大浜他, 1981)。指さしの複合的形式の成立は伝達機能の成立、複雑化に寄与する重要な要因であろう。

第3に、相互作用の流れの中で、子どもの指さしが自発的に生ずるのか、母親の行動への応答として生ずるのかということも、指さしの伝達機能の成立に影響するだろう。特に応答の指さしは、母親の行動の理解が必要になるので、単に自己の意図表出の指さしに比べ、より複雑である。そこで、応答の指さしが可能になること自体、子どもの伝達能力の向上を示すものと考えられる。また、子どもの指さしが自発であるよりも応答である方が、母親は自分の行動との関係で、その伝達機能をよりよく理解できるだろう。

最後に、伝達の指示行動には様々なものがあり、指さしはそのひとつにすぎない。本研究では、言語出現の有無にかかわらず、大人にも子どもにも用いられる慣習的非言語行動として重要であること、形式の個人差が少なく明確にとらえられること、頻度が比較的高いこと、などの理由から特に指さしをとりあげることとした。

II. 方 法

A. 分析資料

9組の母子の日常場面における生後30ヵ月までの縦断観察資料から、9, 11, 13, 17, 21, 24, 30ヵ月の7月齢の資料をとり出し、母親が応答可能な距離にいる場合に生じた子どもの指さし行動およびそれに対する母親の応答行動について分析する。分析対象となる子どもの指さしには、指示行為が明白であれば人さし指の独立のないものも含まれている。なお、対象となる月齢については、同一被験児の時間標本法資料の分析結果(大浜他, 1981)を参考にして次のように選んだ。まず①指さしの初出時期: 9名中2名に指さしのみられる9ヵ月, 5名の11ヵ月, 9名全員に指さしのみられるようになる13ヵ月, 次に②指さしの最頻出の時期: 17ヵ月, 21ヵ月, 最後に③指さしの減少一定化する時期: 24ヵ月, 30ヵ月。分析資料の観察セッション(10分単位)数は、月齢順に109, 118, 58, 54, 54, 37, 30, 計460である。

B. 分析方法

1. 子どもの指さし行動のカテゴリ

子どもの各指さしをそれぞれ以下の3要因について分類する。

1) 指さしの対象

- ・絵：絵本、パンフレットなどの絵や、コップ、皿などに描かれた絵。
- ・絵以外：三次元の人、物、空間など。

2) 指さしの自発・応答性

- ・完全自発：先行する母親の行動に無関係に生じたもの。

例) 壁の帽子を見て指さし〈アッ〉

- ・不完全自発：母親の指示要求以外の何らかの行動(命名、説明、注意喚起など)をきっかけとして生じたもの。

例) 絵本の中のカタツムリを母親が指さし〈デンデンムシ〉と言うと、子どもが母親の顔を指さし〈ママ、ママ(歌をうたえという意味)〉と言う。

- ・応答：母親の、子どもによる指示行動(指さしや言語)を要求する行動(〈どれ?〉、〈どっち?〉、〈〇〇ある?〉など)の直後に生じたもの。内容の適否は問わない。

例) 絵本を見て、母親が〈ワンちゃんのお耳どこ? ないね〉というとき、子どもが絵本の犬の鼻を指さす。

3) 指さしに伴う発声の有無・種類

- ・発声なし：指さしの前後に発声を伴わないもの。
- ・喃語・原初語：非叫喚音からなる一連の音声、意図不明瞭な発声(喃語)や日本語にはなっていないが、文脈により伝達意図のわかる発声(原初語)を伴うもの。
- ・言語：日本語の形を持ち、一貫した使用傾向の認められる発声を伴うもの。

2. 母親の応答行動のカテゴリ

子どもの指さしの後に生ずる、母親のひとまとまりの行動を、言語・非言語別に以下のカテゴリに分類する。カテゴリのAからFの順序は、子どもの指さし行動の伝達機能の発達順序に対応し、月齢につれて増加または減少傾向を示すものと予想する。

A; 指さしの伝達機能を認めないもの。

1. 無反応—指さしを認めうる距離にいるが気づかず、指さしの前後で変化なく、傍観や他の行動をしている。
2. 拒否・禁止—何らかの理由(安全、言語要求)で、指さし行動自体を認めない。

例) 〈いじっちゃだめ〉

〈はっきり言って〉

B; 指さしの伝達機能を認めているが、意図内容は理解していないもの。

- ・明確化要求—指さしの意図内容を理解しようとし、付加情報を求める。

例) 〈どれ?〉〈なに?〉〈どうしたの?〉〈ん?〉〈ここ?〉

C; 指さしの伝達機能を認めたことを示すが、意図内容を理解した証拠のない消極的応答。

- ・確認—あいつち、返事、子どもや対象物に注目する、ほほえみかける。

例) 〈そう〉〈うん〉

D; 指さしの伝達機能を認め、さらに、意図内容を対象に関する情報要求と特定化して理解し、指示対象の命名、説明などの知識を与える積極的応答。

1. 命名—対象の命名。子どもの発声の模倣、拡充的なもの、訓練的なもの、疑問音調なども含む。

例) 〈ワンワン〉〈ゾーサン?〉

2. 属性説明—対象のもつ様々な特徴、状態の説明。擬態・擬音を含む。

例) 〈ミキサー車って大きいのよ〉
〈クルクルクル〉

E; 指さしの伝達機能を認め、さらに、意図内容を子どもの内的感情の表明と特定化して理解し、それを言語化または確かめる積極的応答。

1. 意図の言語化—子どもの感情を判断して説明、記述する。

例) 〈車ほしいの〉〈好きなのね〉

2. 意図の質問—子どもの感情を判断したうえでそれを確かめる。

例) 〈とるの?〉〈ほしいの?〉

F; 指さしの伝達機能を認め、さらに、意図内容を子どもの内的感情の表明と特定化しているが、それは前提にして直接示さず、次の反応に移っている積極的応答。

1. 意図に従う行為遂行—子どもの求める行動をする。

例) 子どもの指さした対象物をとってやる。〈おおかみがきたよ〉という決まった台詞をいう。

2. 展開—発展的な説明、要求、疑問、評価などを行なう。

例) トラックを指したので〈じゃダンブどれ?〉

カタツムリの話のあと、母親の顔を指さしたので〈ママ歌いたくない〉

表1 指さし及び応答の頻度

月 齢	9	11	13	17	21	24	30	計
指さし出現児数	1	5	8	8	7	7	7	—
指さし総数	10	102	85	392	492	267	269	1,617
10分単位セッション平均指さし数	0.1	0.9	1.5	7.3	9.1	7.2	9.0	3.5
母親応答言語行動単位数	10 (1)	102 (17)	94 (17)	388 (76)	561 (51)	295 (27)	249 (48)	1,699 (237)
母親応答非言語行動単位数	10	102	85	392	498	268	270	1,625

()内は、指さしに対して言語行動による応答のなかった指さしの数である。

Ⅲ. 結果と考察

指さし及び応答の頻度を表1に示した。今回の分析資料では、9か月で指さしの出現している子どもは1名であり、13か月から全員に出現するようになる。指さしのセッション平均頻度は13から17か月にかけて急増し、以後30か月まではほぼ一定である。

母親の応答行動は、子どもの指さし直後のひとまとまりの行動の中に、異なるカテゴリに分類される行動が含まれているときには、1つの指さしに対して2つ以上の応答行動単位を認め、カテゴリ化を行った。これは言語、非言語（動作）どちらにもいえる。実際に2種類以上のカテゴリ化を行った応答は、指さし総数を母数として、言語で18.0%、動作で0.5%であった。これを、それぞれの総カテゴリ単位数を母数とすると、言語で18.8%、動作で0.5%になる。またカテゴリ化が4種類以上になる場合はなく、3種類の場合も言語でわずかにみられるだけである。全体に2種類以上のカテゴリ化をした応答の割合が少ないこと、さらに2種類の片方はほとんどが確認(C)であることから、以下では、全カテゴリ化単位を込み（すなわちカテゴリののべ数）にして分析する。

A. 指さし行動のカテゴリ

子どもの指さしの3つの要因と月齢について4要因の分散分析を行った結果、有意差のあった2要因の交互作用は、月齢×対象 (F=3.617, P<.01), 月齢×発声 (F=6.786, P<.001), 対象×発声 (F=4.390, P<.05) 自発・応答性×発声 (F=4.143, P<.01), であった。

図1は指さしの対象の月齢変化を示している。9か月では対象が実物であり、絵を指さすことはないが、11か

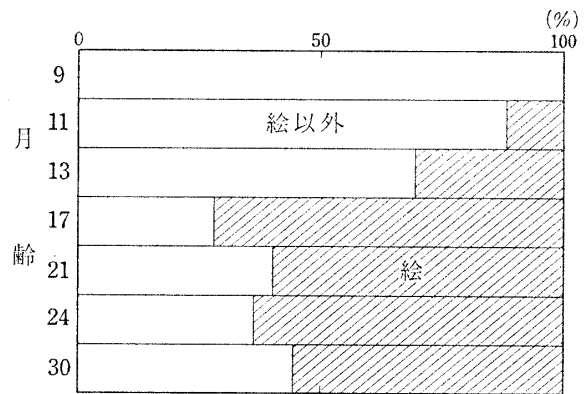


図1 指さしの対象

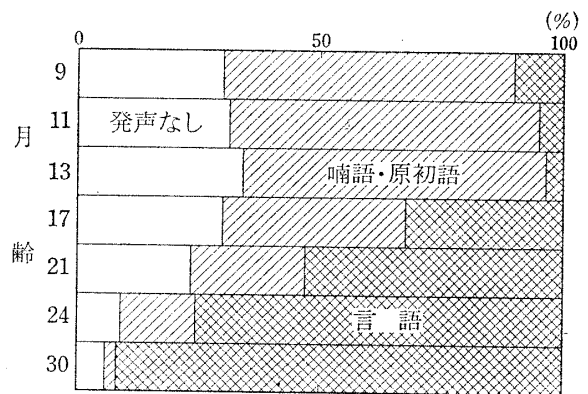


図2 指さしに伴う発声の有無・種類

月以後絵を対象とすることが多くなり、17か月以後はそれが50%以上になる。図2は指さしに伴う発声の有無・種類の月齢変化を示す。発声を伴わない指さしは17か月までは30%以上だが以後減少し、30か月では5%程度になる。指さしに発声の伴う傾向は、9か月から強く、発声の種類は13か月まではほとんどが喃語・原初語だが、17か月以後、言語が増加し、30か月では指さし全体の90%以上に言語が伴うようになる。図3は、指さしの自

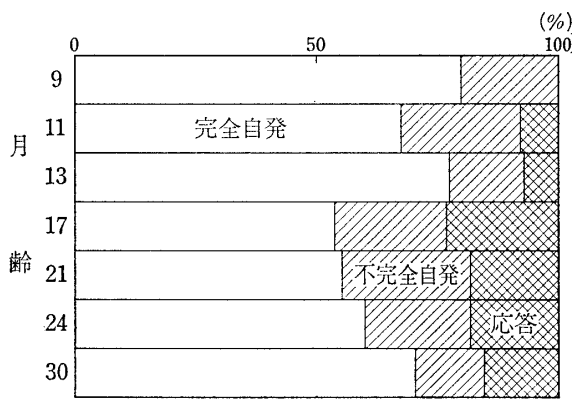


図3 指さしの自発・応答性

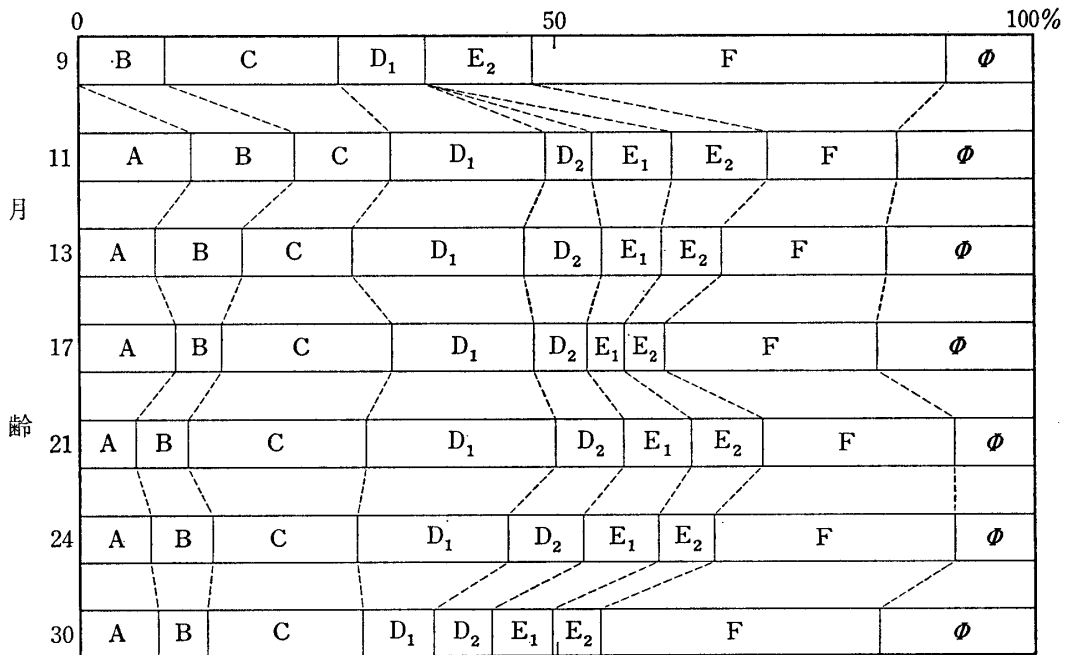
発・応答性を示す。どの月齢でも50%以上が完全自発である。応答の指さしは9か月ではみられないが11か月以後みられ、17か月からは20%近くになる。以上の3要因と月齢については、17か月がどの要因においても下位カテゴリの質的变化の著しい時期といえよう。

次に3要因間の交互作用の内容をみる。対象と発声については、対象が絵の場合に比べ、絵以外の際に指さしに喃語・原初語の伴う傾向が強く、逆に言語の伴うことが少ない。また、伴う発声が喃語・原初語より言語の多くなる月齢は、対象が絵の場合の方がはやく、17か月であるのに対し、対象が絵以外の場合には21か月と遅れている。これらのことは、対象が絵の場合に言語の使用

が促進されていることを示唆する。次に、自発・応答性と発声の交互作用では、完全・不完全自発の指さしの方が応答の指さしよりも発声を伴う傾向が強い。発声を伴わない指さしよりも発声を伴う指さしの方が多くなる月齢は、完全自発が9か月で最もはやく、不完全自発は11から17か月の間であり、応答ではむしろそのような明確な移行はみられない。しかし、喃語・原初語よりも言語を伴う指さしの量が多くなるのは、応答の場合にも21か月以後認められている。以上から、自発の指さしに比べ、応答の場合に、13か月以後一貫して発声を伴わない指さしが多いことは、応答において発声による注意喚起の不必要なことを示している。このことはまた伝達行動における複合的手段の適切な使い分けを、この時期にすでに身につけていることを示唆する。

B. 母親の応答行動のカテゴリ

図4は母親の言語による応答行動の総単位数に、言語のない動作のみの応答数を加えたものを母数として、各カテゴリの割合を示したものである。9か月を除いて、ほぼ予想通りに月齢に伴うカテゴリの増減がみられる。指さしの伝達機能を全く認めない、無反応、拒否・禁止(A)は少なく、指さしは出現と同時にその伝達機能が認められ、母親の応答を導くことが多い。伝達機能だけではなく、意図内容も特定化して理解できたことを示す命



1. Aは、無反応(A₁)と拒否・禁止(A₂)を加えたもの。同じくFは意図に従う行為遂行(F₁)と展開(F₂)を加えたもの。
2. phiは言語行動のない動作のみによる応答を示す。

図4 母親の言語による応答行動カテゴリ

名(D₁)から行為遂行, 展開(F)までをあわせた割合は, どの月齢でも50%以上であり, 母親が初期から子どもの指さしの伝達的な意図内容を認めうることを示している。月齢による変化は, 伝達機能を認めた上で意図内容をたずねる明確化要求(B)が11か月以後減少し, 逆に確認(C)は同じく11か月以後17か月頃まで増加している。これは指さしの理解の可能性が高まっていることを示すものと思われる。次に特定化して理解された意図内容の月齢変化をみる。意図内容の特定化された応答カテゴリのうちで, 命名, 属性説明(D)や意図の言語化, 質問(E)では, 指さしの指示対象や子どもの内的感情を母親が補助し, とりたてて表現している点で, 子どもの指さし行動と母親の応答は直接的な関係がある。それに対し, 行為遂行, 展開(F)は子どもの意図内容の直接の表現ではなく, それを前提として, 母親の立場から答えており, 子どもの指さし行動が相互作用の中で形式, 機能の両面で独立した位置を占めている。したがって大人同志の相互作用の場合では, カテゴリ D, E はおそらくあまり生じないだろうがFは十分起こり得る応答である。子どもに対する応答として特徴的な命名 (D₁) は, 11~24か月という中間の月齢で最も多く, 属性説明 (D₂) を加えるとさらにその傾向が強まる。そこでこの時期では指さしの対象となる外界事象の知識をテーマとしたやりとりが特徴的だといえよう。次に, やはり子どもへの応答として特徴的な, 意図の言語化 (E₁), 意図の質問 (E₂) では, 月齢に伴う明確な増減の傾向はなく, かなり一貫して用

いられている。子どもの指さしが伝達行動として独立していると考えられる, 行為遂行, 展開(F)をみると, 9か月で最も多く, 予想に反する。9か月は無反応, 拒否・禁止(A)がなく, 確認(C)も多いなど, むしろ11か月頃よりも母親による指さしの理解が十分に行われているようにみえる。この点については, 9か月の指さしが一組の母子のデータであり, 頻度が少ないという問題もあるが, むしろ, 客観的には理解不能な子どもの指さし行動に対する母親の一方的な意図の解釈によって, 指さしの意図内容がかえって一義的になったものと考えられる。これに対し, 11か月以後の行為遂行, 展開(F)の増加傾向は, 子どもの伝達能力の発達につれて, 母親が一方的にコントロールするのではなく, 子どもの変化を考慮した上で一義的に意図内容を理解するようになる過程を反映しているものと考えられる。最後に, 子どもの指さしに対する応答に言語がない場合(φ)は20%以下であり, 月齢に伴う一貫した傾向はみられない。これらの動作は, 9か月では主に行為遂行(F₁)であり, 11か月以後は注視やうなづきによる確認(C)が大部分を占める。

次に, 言語の有無によらず, 動作による応答行動総単位数を母数として, 動作の応答カテゴリそれぞれの割合を図5に示した。言語のない動作が20%以下ということからもわかるように, 指さしに対する応答で主要なものは, 9か月から言語だといえよう。動作の応答として最も多いのが, 消極的な応答の確認(C)であることもそれを示していると考えられる。しかし, 指さしの特定行動

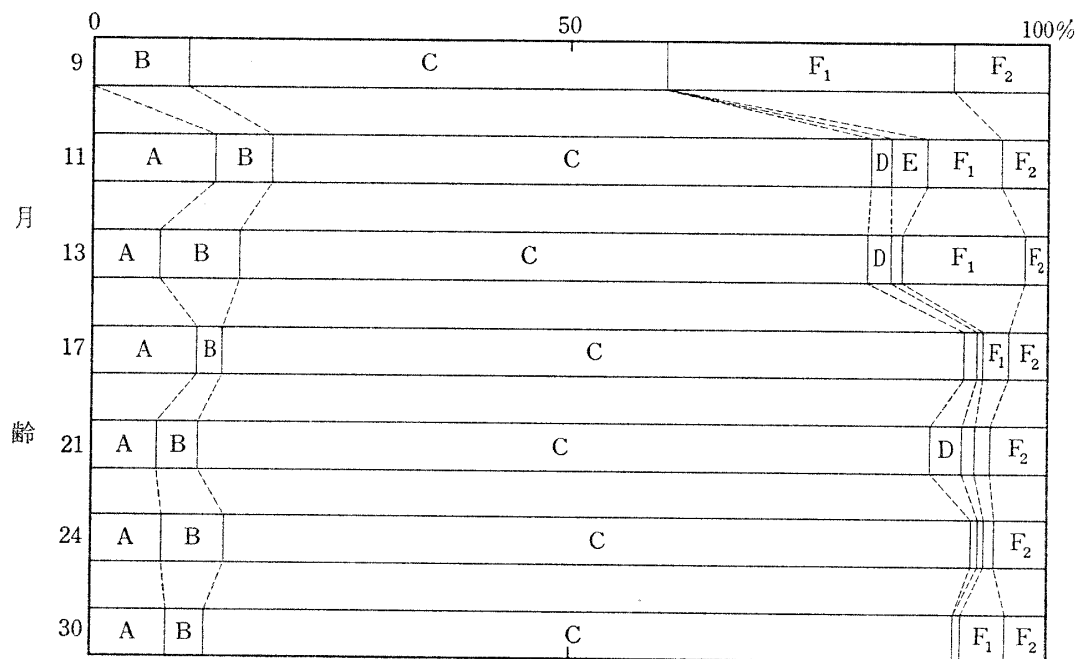


図5 母親の動作による応答行動カテゴリ

要求という意図に従う応答である行為遂行(F₁)は、9か月で最も多く、以後減少している。これは明らかに、動作による応答が低月齢に多いことを示しており、言語の未熟な子どもに対する応答の特徴といえよう。意図内容を特定化したことを示す応答カテゴリDからF₂までの合計でみると、このことはいっそう明らかである。

C. 指さしの対象と母親の応答行動

以下では、子どもの指さしの要因別に、その下位カテゴリと母親の応答行動カテゴリの関係についてみていく。今回の分析では、言語を中心とし、動作による応答行動カテゴリの分析は省略する。

母親の応答行動の質的差異の大まかな傾向をとらえるために、スピアマンの順位相関係数をもとめた(表2)。各指さし要因の下位カテゴリに対する母親の行動に差がなければ各下位カテゴリにおける母親の応答行動カテゴリの相対的順序の相関は高いだろう。逆に、差があれば、相関は低いと考えられる。

指さしの対象間には、相関がないので、指さしの対象が絵か絵以外かによって差異があるものとみなせる。そこで、それがどのような差異なのかを探っていく。図6に各対象ごとの母親の応答行動を100として、母親の応答行動カテゴリの割合を示した。

無反応、拒否・禁止(A)は、図6で示した言語による応答ばかりでなく動作による応答でも、指さしの対象が絵の時より絵以外の時に多い。これは、絵以外の指さしが、絵に対する指さしに比べて母親に受容されにくいことを示していると思われる。また、明確化要求(E)も、絵以外の時に多くみられる。対象が絵以外の方が、文脈が限定されにくく、子どもの指さしの意図を理解するの

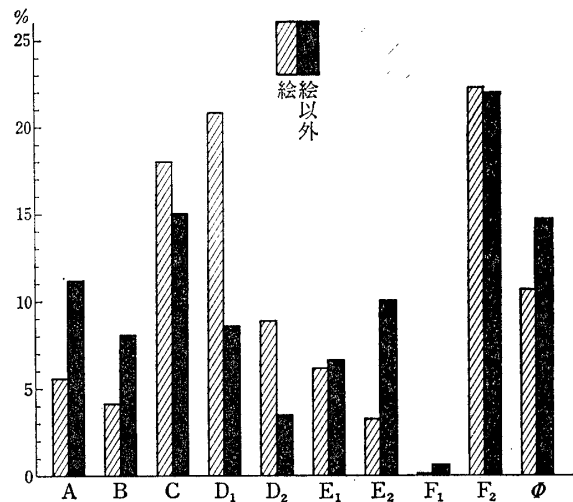


図6 子どもの指さしの対象別母親の応答行動カテゴリ(言語)の割合

が難しいのであろう。このことが絵以外での意図の質問(E₂)を多くしているとも考えられる。逆に、確認(C)、命名(D₁)、属性説明(D₂)は、対象が絵の時の方が多くなっている。指さしの対象が絵の場合には、母親に受容されやすいばかりでなく、対象をテーマとした言語による知識授受が行われやすいのだといえよう。ことばを伴わない動作のみ(φ)の応答が、絵で少ないのもこのことを示唆していると思われる。

さらに、母親の応答行動カテゴリの月齢による変化を指さしの対象別にみる(表3)と、絵以外においては、11、13か月で、命名(D₁)、言語なし(φ)が非常に多い。しかし、命名(D₁)は17か月以降、急激に減少、また、言語なし(φ)も、この17か月から一時的にはあるが、減少傾向を示す。逆に、展開(F₂)、確認(C)は17か月以降多くみられるようになる。絵以外の指さしに対しては、17か月に大きな質的変化があるといえよう。この変化時期は、すでにみてきた子どもの指さしの発達の变化の時期と一致しており、絵以外の指さしに対する母親の応答は、子どもの発達変化を敏感に反映するものと思われる。一方、絵においては、それに対する指さしのみられるようになる11か月以降24か月までは、一貫して命名(D₁)が多い。また、展開(F₂)も13か月以降一貫して多く、絵以外でみられるような大きな月齢的变化はない。すなわち、絵の指さしに対して、母親は、少なくとも24か月までは、月齢にかかわらず、一定した応答をしやすく、特に命名(D₁)の多いことは、その応答がかなり言語教授的であることを示しているといえよう。ただし、30か月においては、絵への指さしに対して、命名(D₁)が急減、展開(F₂)がさらに増加するなど、絵以外へ

表2 指さし要因別順位相関

指さしの要因		相関係数
対象	絵 vs. 絵以外	.467
自発・応答性	完全自発 vs. 不完全自発	.686*
	完全自発 vs. 応答	.326
	不完全自発 vs. 応答	.817**
伴う無発声の種類の類	発声なし vs. 喃語・原初語	.711*
	発声なし vs. 言語	.733*
	喃語・原初語 vs. 言語	.762*

* 5%の有意水準

** 1%の有意水準

表3 子どもの指さしの対象別母親の応答行動カテゴリ (言語)
月齢別上位3カテゴリ (%)

月齢	9	11	13	17	21	24	30
指さしの対象							
絵		D ₂ 属性説明 (23.5) D ₁ 命名 (17.6) C確認 (11.8) E ₁ 意図の言語化 (11.8) E ₂ 意図の質問 (11.8)	F ₂ 展開 (25.0) D ₁ 命名 (22.5) D ₂ 属性説明 (17.5)	F ₂ 展開 (22.8) C確認 (19.1) D ₁ 命名 (17.3) φ言語なし (17.3)	D ₁ 命名 (27.1) C確認 (20.3) F ₂ 展開 (20.1)	F ₂ 展開 (22.3) D ₁ 命名 (21.4) C確認 (15.3)	F ₂ 展開 (26.3) C確認 (15.6) φ言語なし (15.0)
絵以外	F ₂ 展開 (45.5) C確認 (18.2) B明確化要求 (9.1) D ₁ 命名 (9.1) E ₂ 意図の質問 (9.1) φ言語なし (9.1)	D ₁ 命名 (15.7) φ言語なし (15.7) F ₂ 展開 (14.7)	φ言語なし (21.1) D ₁ 命名 (15.5) B明確化要求 (14.1)	F ₂ 展開 (20.0) C確認 (17.9) φ言語なし (14.3)	F ₂ 展開 (19.8) C確認 (16.0) E ₂ 意図の質問 (13.6)	F ₂ 展開 (30.8) C確認 (15.0) φ言語なし (14.0)	F ₂ 展開 (30.0) φ言語なし (17.7) C確認 (16.9)

の指さしに対する30か月の応答パターンと類似してくる。

D. 指さしに伴う発声の有無・種類と母親の応答行動

子どもの指さしに伴う発声の有無・種類と母親の応答行動との関係についてみる。カテゴリの順位には相関がみられる(表2)ので、発声の有無、種類によらず母親の応答が一貫していることが示されている。しかし、詳細にみていくと、発声の有無・種類により母親の応答行動に幾つかの違いを認めることができる。図7に示すように指さしのみの時の応答では、展開(F₂)、言語なし(φ)が多く、また無反応、拒否・禁止(A)も比較的多い。一方、明確化要求(B)は著しく少なく、確認(C)も発声の伴う指さしと比べ、相対的に少ない。子どもが発声を伴わずに指さしだけをしている場合の母親の応答は、無視または拒否するか、子どもの指さしの一方的解釈をしてさらに展開する、あるいは動作のみで受容するという両極を示す。喃語・原初語を伴う指さしに対しては明確化要求(B)、確認(C)、属性説明(D₂)、意図の質問(E₂)が多く、展開(F₂)が相対的に少ない。喃語・原初語という発声を伴う指さしに対しては、伝達機能を認めることはできても、意図内容については特定化できないと考えられる。このことから、母親は一方的な解釈を

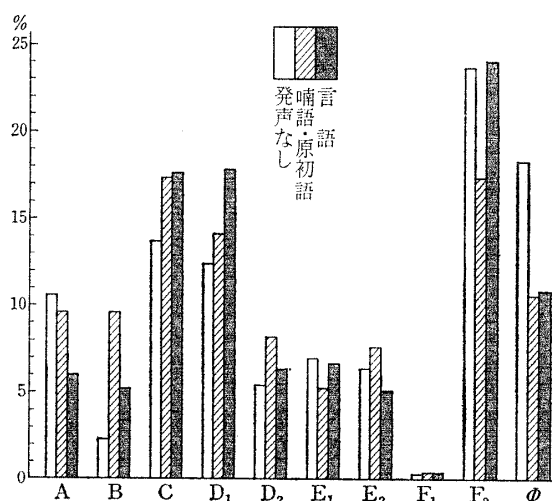


図7 子どもの指さしに伴う発声の有無・種類別母親の応答行動カテゴリ (言語) の割合

してさらに展開させるよりもむしろ、子どもの伝達意図を認めたことを伝えたり、意図を明白にしようとしたりする。言語を伴う指さしに対しては確認(C)、命名(D₁)、展開(F₂)で応じており、無反応、拒否・禁止(A)は少ない。指さしに言語が併用されることにより、伝達機能のみでなく、意図内容の理解も可能になるため、母親により受容されやすくなるものと思われる。

表4 子どもの指さしに伴う発声の有無・種類別母親の応答行動力カテゴリ(言語)
月齢別上位3カテゴリ(%)

月 齢	9	11	13	17	21	24	30
発声の有無・種類							
発声なし	F ₂ 展 開 (66.7) E ₂ 意図の質 問 (33.3)	φ 言語なし (25.7) D ₁ 命 名 (17.1) A 無反応, 拒否・禁止 (14.3)	φ 言語なし (23.1) F ₂ 展 開 (17.9) D ₁ 命 名 (15.4) D ₂ 属性説明 (15.4)	F ₂ 展 開 (26.2) C 確 認 (21.3) φ 言語なし (15.6)	F ₂ 展 開 (28.1) φ 言語なし (16.4) D ₁ 命 名 (12.5)	F ₁ 展 開 (26.9) C 確 認 (19.2) A 無反応, 拒否・禁止 (11.5) E ₂ 属性説明 (11.5) φ 言語なし (11.5)	φ 言語なし (43.8) C 確 認 (25.0) A 無反応, 拒否・禁止 (18.8)
喃語・原初語	C 確 認 (28.6) F ₂ 展 開 (28.6) B 明確化要 求 (14.3) D ₁ 命 名 (14.3) φ 言語なし (14.3)	D ₁ 命 名 (16.7) F ₂ 展 開 (15.4) B 明確化要 求 (14.1)	D ₁ 命 名 (20.6) F ₂ 展 開 (16.2) B 明確化要 求 (14.7)	F ₂ 展 開 (20.5) C 確 認 (14.2) φ 言語なし (13.6)	C 確 認 (27.7) D ₁ 命 名 (14.9) F ₂ 展 開 (11.5)	F ₂ 展 開 (25.9) C 確 認 (14.8) D ₂ 属性説明 (13.0)	C 確 認 (37.5) A 無反応, 拒否・禁止 (12.5) B 明確化要 求 (12.5) E ₁ 意図の言 語化(12.5) F ₂ 展 開 (12.5)
言 語	F ₂ 展 開 (100.0)	E ₁ 意図の言 語化(33.3) B 明確化要 求 (16.7) C 確 認 (16.7) F ₂ 展 開 (16.7) φ 言語なし (16.7)	C 確 認 (50.0) D ₂ 属性説明 (25.0) φ 言語なし (25.0)	C 確 認 (21.8) φ 言語なし (20.4) D ₁ 命 名 (19.7) F ₂ 展 開 (19.7)	D ₁ 命 名 (25.0) F ₂ 展 開 (20.5) C 確 認 (19.6)	F ₂ 展 開 (24.8) D ₁ 命 名 (18.6) C 確 認 (14.9)	F ₂ 展 開 (30.0) C 確 認 (15.0) φ 言語なし (15.0) D ₁ 命 名 (8.1)

注) 太線外は頻度10未満のもの

次に月齢に伴う変化をみる(表4)。指さしの場合、11, 13か月及び30か月では言語なし(φ)の応答が多く、動作的手段による相互作用が成立していると思われるが、低月齢での言語なしと高月齢でのそれとは質的に異なるものと考えられる。すなわち、低月齢での言語なしによる応答では、母親が、子どもの指さしが生起する文脈を周到に用意し、子どもの指さしの生起をもって相互作用を終了するようなパタンに子どもを組み入れ、子どもの指さしが所期の目的通りに生じた場合は、うなづきなどの動作による軽い受容をすることで、相互作用の終了を示していると思われる。高月齢では、今度は子どもの側が、二者の了解を前提として、発声を省略したやりとりを行っていると考えられる。17から24か月では展開(F₂)が一位を占め、子どもの指さしが生じたことを契機

としてさらに相互作用を継続していこうとするものと思われる。喃語・原初語を伴う指さしへの応答では、11, 13か月で命名(D₁)、17, 24か月で展開(F₂)、21か月で確認(C)が最も多い。また、これとはややずれて言語を伴う指さしでは17か月で確認(C)、21か月で命名(D₁)、24, 30か月で展開(F₂)が最も多くなる。確認の応答は言語についての方が早くからみられ、17か月の言語に対しては発声行動そのものの承認という意味で確認という応答が生ずるものと考えられる。この段階では言語が十分に機能しておらず、情報を組織的に分担するという意味での機能分担をもった相補的關係を示すようになり始めるのは21か月以降であり、この結果は大浜他(1981)で得られた知見とも一致する。命名から展開へという応答の推移については、次のように考えられる。すなわち、母

親は子どもの発声に対して特に敏感であり、原初語や言語の急増の時期にはこれらの発声に対して命名といった訓練的応答を主体とし、子どもが文脈を考慮したり、他の手段との併用をしたりすることにより、発声を有効に用いられるようになると、意図内容を了解したうえで、さらに発展的に応ずるようになると考えられる。

E. 自発・応答性と母親の応答行動

完全自発、不完全自発、応答をそれぞれ比較すると、完全自発と応答との間に大きな差があると考えられる(表2)。以下では、完全自発と応答との差を中心にして、あわせて両者の中間に位置すると予想される不完全自発の意味も探っていく。

図8に、母親の応答行動カテゴリの割合を完全自発・不完全自発・応答別に示した。無反応、拒否・禁止(A)明確化要求(B)及び命名(D₁)は、完全自発、不完全自発、応答の順に相対的に頻度が少なくなっている。反対に、確認(C)、属性説明(D₂)、展開(F₂)、及び言語なし(φ)は、完全自発、不完全自発、応答の順に多くなっている。また意図の言語化(E₁)、意図の質問(E₂)では、応答でやや多くなっている。

さらに、表5に、月齢別に多くみられる母親の応答行動カテゴリを示した。まず、子どもの応答の指さしに対する母親の言語カテゴリをみると、13か月から30か月まで一貫して、展開(F₂)と確認(C)とが多いことがわか

る。この傾向は、特に17、21、24か月で顕著である。また、属性説明(D₂)は、21か月と24か月でかなり多くみられる。以上のことは、母親が子どもに指示行動を求めるときには、子どもの応答を確認するだけでなく、子どもの指示行動をきっかけにしてさらに発展的説明をすることが多いことを示している。低月齢では、母親は子どもに指示行動を求めるときにすでに子どもに対する説明を意図していることが多く、子どもの応答の指さしに言語の伴う割合が多くなる21か月以降では、子どもの応答をきっかけとした発展的説明が多くなると考えられよう。

完全自発では、11か月から24か月にかけて命名(D₁)が多くみられる。ただし17か月では展開(F₂)が多く、命名(D₁)はわずかしかない。17か月は、子どもの指さしに伴う言語が急増する時期であり、子どもの明確な意図を母親に示すことが可能となり、母親はそれに対し発展的説明で応じることが多いと考えられる。そして17か月に母親の言語なし(φ)が多いことも、17か月が子どもの指さしと言語でひとつの完結した伝達が成立しうようになることの萌芽の時期であることを示すものであろう。21、24か月に再び命名(D₁)が多くなるのは、語彙習得期にある子どもの指さしを命名訓練の機会として利用していることを示している。30か月では、展開(F₂)と確認(C)及び言語なし(φ)が多くなり、応答との差が小さくなっている。

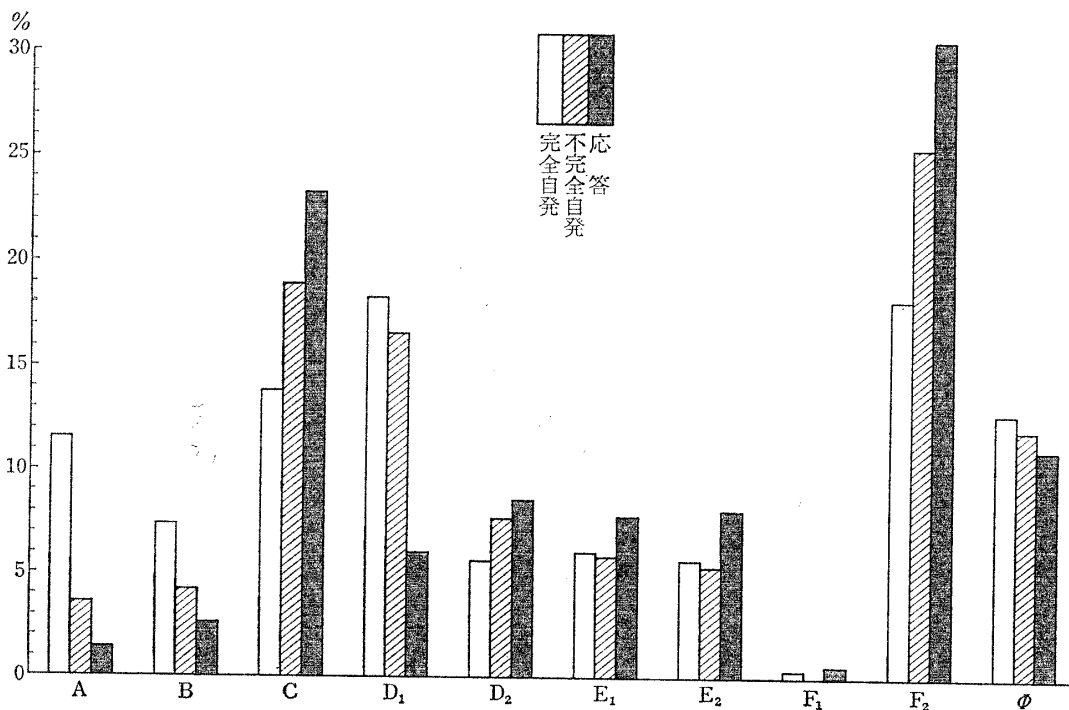


図8 子どもの指さしの自発・応答性による母親の応答行動カテゴリ(言語)の割合

表5 子どもの自発・応答性による母親の応答行動カテゴリ (言語)
月齢別上位3カテゴリ (%)

月齢	9	11	13	17	21	24	30
自発・応答性							
完全自発	F ₂ 展開 (33.3) C 確認 (22.2) B 明確化要求 (11.1) D ₁ 命名 (11.1) E ₂ 意図の質問 (11.1) φ (11.1)	D ₁ 命名 (20.0) A 無反応, 拒否・禁止 (16.3) φ 言語なし (13.8)	φ 言語なし (19.5) D ₁ 命名 (18.3) F ₂ 展開 (13.4)	F ₂ 展開 (19.0) φ 言語なし (18.2) A 無反応, 拒否・禁止 (17.0)	D ₁ 命名 (24.1) C 確認 (16.2) F ₂ 展開 (14.9)	D ₁ 命名 (21.7) F ₂ 展開 (20.1) C 確認 (11.1)	F ₂ 展開 (25.4) C 確認 (14.6) φ 言語なし (14.6)
不完全自発	F ₂ 展開 (100.0)	F ₂ 展開 (22.6) φ 言語なし (19.4) D ₂ 属性説明 (12.9)	D ₂ 属性説明 (26.3) D ₁ 命名 (21.1) C 確認 (15.8) F ₂ 展開 (15.8)	C 確認 (24.3) D ₁ 命名 (21.6) F ₂ 展開 (18.0)	F ₂ 展開 (23.7) D ₁ 命名 (21.3) C 確認 (19.5)	F ₂ 展開 (35.8) C 確認 (14.9) φ 言語なし (13.4)	F ₂ 展開 (38.1) C 確認 (21.4) φ 言語なし (16.7)
応答		B 明確化要求 (25.0) E ₁ 意図の言語化 (25.0) E ₂ 意図の質問 (25.0) F ₂ 展開 (25.0)	F ₂ 展開 (40.0) A 無反応, 拒否・禁止 (20.0) C 確認 (20.0)	F ₂ 展開 (33.0) C 確認 (23.9) φ 言語なし (17.9)	F ₂ 展開 (28.6) C 確認 (24.3) D ₂ 属性説明 (13.0)	F ₂ 展開 (28.8) C 確認 (27.3) D ₂ 属性説明 (13.6)	F ₂ 展開 (30.1) φ 言語なし (23.8) C 確認 (19.0)

次に、不完全自発の指さしに対する母親の言語をみると、9、11か月と21か月以降では、応答の場合と同様に展開(F₂)が最も多いが、13か月では属性説明(D₂)、17か月では確認(C)が最も多くなっている。また、13、17、21か月では命名(D₁)が2番目に多い。不完全自発は、21か月頃までは、命名が多くみられるなど完全自発と共通した性質をより強くもち、24か月頃以降は、むしろ応答に近い性質をもつと考えられる。

以上みてきたように、30か月になると、自発・応答に係りなく、母親の展開(F₂)、確認(C)及び言語なし(φ)の応答カテゴリが多くなる。これは、先行する母親の行動に係りなく、子どもの指示行動が同一の伝達機能を果たし得るようになることを示す。すなわち、30か月になると、子どもは母親との伝達場面において、伝達の開始者としても応答者としても、指さしと言語の併用という複合的伝達手段を用いることにより、母親と対等なパートナーとなり得ると考えられる。

IV. 討 論

A. 指さしと発声との複合性の発達

伝達行動の発達について考える際に、非言語行動をどのように扱うかについては次の2つの立場が考えられよう。ひとつは、非言語行動は子どもの伝達行動の発達において、言語行動に先行するものとする立場である。このように考える研究者は多く、非言語行動を言語の原初的な形態とみなす。Clark(1978)は、指さしから言語へという発達過程の仮説を示し、指さしと言語の併用を未熟な言語を補うものとして捉えている。これに対し我々は、伝達の相互作用における必要な構成要素として非言語行動が発声とともに用いられ、両者が統合される方向に発達していくとする立場に立つ。すなわち、言語と非言語行動に各々機能的相違があることを認め、両者が機能を分担しつつ、伝達行動において統合的に用いら

れると考える。この観点から指さしと発声との併用について考察する。

第1に、指さしと発声との併用が、手段間の機能分担という形で相補的となるのは20か月頃からという大浜他(1981)の結果を本研究でも確認した。これ以前の言語は、原初語とかなり類似した場面依存的性質をもち、指さしの併用についても、複数の手段を組織的に利用するというのではなく、機能の重複にもかかわらず手段を併用する方略に基くものである。したがって、伝達機能は母親に受容され、うなづき、あいづちなどの応答を導くことはあっても、伝達内容を理解されることは少ない。しかし、20か月頃から言語と指さしとの併用に対して命名や展開など内容の理解に基く応答がみられるようになり、複合的形式が本格的な複合的伝達行動として機能し始めると考えられる。

第2に、指さしと言語との併用という形で手段間の機能が相補的となる以前の発声との併用についても、単なる手段の併用でなく、併用の必要な文脈と必要でない文脈を区別して使いわけていることが明らかにされた。指さしはその出現当初から発声を伴う傾向が強く、9か月から既に約70%の指さしが発声を伴っている。これは単なる機械的併用ではない。自発・応答性と発声を伴う指さしとの生起についてみると、早期からみられる自発的な指さしでは発声を伴う傾向があるが、11か月からみられるようになる応答の指さしでは発声を伴うことが少ない。このような使い分けがなぜ生ずるのか。この理由としては次のことが考えられよう。自発の指さしでは原初語を伴うことが自己の意図する新しい対象への相手の注意を喚起する機能を果たすと考えられるが、他方応答の場合は、今回の資料では主に指示要求に対するものであり、母親の「どれ?」「どっち?」「〇〇ある?」に対して生じたもので、指さしのみでも応答機能が十分果されると考えられる。したがって、発声を伴わなくともその機能が果たされる場合には発声との併用はせず、発声が必要となる場合のみ発声と併用した指さしをしているといえる。ただし、この後、17、21か月の命名行動が頻出する時期には、指さしに言語(命名)を伴うことが応答の場合にも認められ、情報としては冗長な命名を母子間で繰返すことにより事物の名を習得していくと思われる。この指さしと命名との併用はさらにこの後、指さしと指示語との併用へと変化していくものであろう(辰野他, 1981; 武井他, 1982)。

第3に、発声との併用という複合的形式の伝達行動の獲得は、親の複合的形式の模倣のみによるのではなく、個人間の複合性から個人内の複合性へとという過程を通っ

てなされると予想される。例えば、指さしと命名との併用では、初期には、子どもの指さしに母親が命名を行うことにより、二者間で指さしと命名との機能分担を行っている。それが20か月頃になると、子どもが指さしと命名とを自己の中で統合し、複合的に用いることができるようになるものと思われる。その一例を示す。

○11か月男児

絵本の開いたページを両手でたたくようにして、犬のところを手さしして〈ソ〜〉といい母を見上げる
→母は〈ワンワン〉という。

○21か月男児

絵本の犬の絵を指さし〈ワワン、ワワン〉という→
母は〈あ、ほんとだ、ワンワンいたね〉という。

以上のことから、手段併用の発達の一つの仮説として個人間から個人内へという過程が考えられよう。この点についてはさらに検討していくことが必要である。

第4に、複合的行動が伝達行動の中で効果的な機能を持ち、子どもが適切な手段を選択できるようになるのは、パタン化された相互作用と母親による文脈の用意が大きな役割を果たしていると考えられる。特に言語と指さしとの併用に関して次の2点がいえる。すなわち、絵に対する指さしで生じやすいこと、そして応答の指さしは自発の指さしよりも発達的に遅れて生ずるにもかかわらず、言語との併用は自発と同じく応答でも21か月から多くみられるようになることである。絵に対する指さしは主として絵本場面において生じたものであり、特定の絵に対してパタン化された相互作用が反復されると考えられる。また、応答では、初めは母親の側が子どもの指さしが生じやすい文脈を用意すると考えられるが、その中に言語を伴う指さし行動が組みこまれていくものと思われる。このような母親の役割についてはさらに次節で検討する。

B. 母親のモニタリング行動

従来、母親は子どもの行動を一方向的に方向づけ、コントロールするものと考えられていた。しかし、近年、子どもから特定の反応を得るための母親の技法にしても、それは母親からの一方向的な押しつけではなく、子どもの行動の変化に敏感に母親が応じた結果であり、基本的には子どもの側がイニシアティブをとっていることが示されるようになってきた(Schaffer et al., 1978)。ここで注目すべきことは、単に、子どもが初期から能動性を持っているということだけでなく、母親が子どもの変化に敏感に反応して自己の行動を修正し、自らがとる方略を変えていくのだということであろう。すなわち、少なくとも

発達初期の母親の行動は、子どもの行動をコントロールするというより、モニタリングするということによって特徴づけられると思われる。モニタリングとは自己あるいは相手の行動を敏感に把握し、それに基づいて、次の自己の行動を調整することと定義しうるが、それでは、この母親のモニタリング行動は、子どもの発達においてどのような役割を果たしているのだろうか。指さし行動の発達と母親のモニタリング行動のかかわりを以下（表6）にまとめ、この母親のモニタリングの果たす役割を

考察していく。

30か月には、伝達行動としての指さし行動がほぼ完成し、母親と対等のパートナーとなるが、このことはすなわち、①母親の行動をモニタリングし、母親の行動に適切な応答行動をすること、②自分自身の伝達行動をメタ認知的にモニタリングして、自分の行動に適切な相手の応答を期待すること、この2つが可能になりつつあることを意味すると思われる。母親が子どもの指さし行動出現当初からそれに伝達意図をもたせ、子どもを相互作用の

表6 指さし行動の発達と母親のモニタリング行動

月齢	子どもの指さしの発達	母親のモニタリング行動とそれの果たす役割
9	指さしの初出時。 自己喚起的性質がつよく、他者に何らかの意図を伝えるという伝達的性質はない。	伝達の意図をもたない指さしを無視することなくとらえ、一方的に解釈説明を加えたり、行動をおこすことにより子どもの指さし行動を相互作用に入れ込む。 子どもの行動をコントロールしているようにみえるが、子どもの行動が非伝達的であることが母親にこのような行動をおこさせるのであり、その意味で母親の行動には、子どもの行動が反映されているというモニタリングの性質が認められる。 〔役割〕 この母親の行動は、指さし行動を非対人（自己喚起）的なものから、対人的なものへ促すと思われる。
11 13	指さしは対人的性質をもつようになるが、伴われる発声为主线に喃語・原初語であることなどによって、その意図内容は明確には伝わらない。	文脈や状況を利用して、指さし行動を解釈展開することにより、相互作用を完結させる。さらには、敏感に子どもの行動を把握し、指さしが生起する文脈を用意し、子どもの指さしの生起をもって相互作用が完結するようなパターン（「スロット構造」）をつくる。 このようなスロット構造をその時の子どもの興味や自発的行動と敏感に一致させ用意することが母親のモニタリングの性質といえよう。 〔役割〕 このスロット構造にはめ込まれることにより、相手の行動をうけとめる応答行動の確立が促されると考えられる。
17 21 24	応答行動としての指さしが増える。 また、指さしに言語が伴われることが多くなり、その指さしの意図内容もかなり明確に示されるようになる（とくに21か月以降）。	引き続きスロット構造へのはめこみは行われるが、母親がその文脈を用意するというより指さしが生起する文脈を母親が効果的に選択して相互作用を展開するようになる。すなわち、特定の対象（例えば絵）への指さしの場合にはスロットを使うが、その他の場合には、指さしの生起を契機として（自発にしろ、応答にしろ）さらに相互作用を展開継続していくことも行われる。 子どもの状況に応じた母親の行動の使いわけは、母親のモニタリング行動の一層の活発化を意味している。 〔役割〕 相互作用において子どもが、自己の伝達行動に対する相手の多様な行動を期待するようになる。
30	伝達行動としての指さし行動がほぼ完成。 母親と対等なパートナーとなってくる。	特定の文脈（絵の場合など）でもスロット構造を用意することがなくなり、相互作用を自由に展開していくようになる。

スロット構造に入れこみ、子ども自身がパートナーとして行うべきことを用意してやるというモニタリング行動がくり返されることは、子どもに上記2種類のモニタリング行動を身につけさせるのに役立つものと思われる。

V 今後の課題

本研究では、子どもの指さし行動に対する母親の応答行動を分析することにより、母子相互作用場面における子どもの伝達能力の発達を明らかにした。今後、指さし以外の伝達の身振りの発達も含めて、言語との併用機能をとらえていく必要がある。また、本研究で不完全自発の指さしと分類した指さし行動をより詳細に分析することにより、子どもが母親との相互作用場面で、母親の行動のどの側面をきっかけにして新しい伝達行動の文脈を作り出しているかを明らかにできるであろう。

文 献

- Austin, J.L. 1975 *How to do things with words.* Harvard paperbacks. 坂本百大(訳)1978. 言語と行為 大修館書店
- Chapman, R.S. 1981 *Mother-child interaction in the second year of life; Its role in language development.* In R.L. Schiefelbusch & D.D. Bricker (eds.), *Early language: Acquisition and intervention.* University Park Press. 201-250.

Clark, E. 1978 *From gesture to word: on the natural history of deixis in language acquisition.* In J.S. Bruner & A. Garton (eds.), *Human growth and development.* Clarendon Press. 85-120.

Masur, E.F. & Gleason, J.B. 1980 *Parent-child interaction and acquisition of lexical information during play.* *Developmental Psychology*, Vol. 14, No. 5, 404-409.

大浜幾久子, 辰野俊子, 斉藤こずゑ, 武井澄江, 荻野美佐子 1981 母子相互作用における指さし行動の発達——時間標本資料の分析——*教育心理学研究* 第29巻3号, 272-278.

Schaffer, H.R. & Crook, C.K. 1978 *The role of the mother in early social development.* In H. McGurk (ed.), *Issues in childhood social development.* Methuen, 武井澄江, 荻野美佐子, 大浜幾久子, 辰野俊子, 斉藤こずゑ 1982 言語行動の発達(V) *東京大学教育学部紀要* 第22巻 43-59.

辰野俊子, 斉藤こずゑ, 武井澄江, 荻野美佐子, 大浜幾久子 1981 言語行動の発達(IV) *東京大学教育学部紀要* 第21巻 77-80.

付記1 この研究に進んで御協力下さいましたお母様, お子様方に記して感謝の意を表します。

付記2 本研究の計算には東京大学大型計算機センターを利用した。

付記3 本研究の一部は, 昭和58年度文部省科学研究費(58710143)の補助を受けた。

〈追記〉 共同研究者であった辰野俊子さんは, この論文の資料分析まで参加し, 構想にも大きく関わっていましたが, 1981年6月に急逝されました。二年余がたちますが, 彼女の加わった最後の共同研究ですので, 本論文を5人の連名とすることで, 彼女の意志を残したく, 御了承いただきたいと思います。1983年9月30日 荻野, 大浜, 斉藤, 武井